

名古屋市および尾東地域で記録された湧水湿地の 可能性のある環境の分布

Distribution of seepage marsh and its possibly environment recorded
in Nagoya City and Bito area

富田啓介（愛知学院大学）

Keisuke TOMITA (Aichi Gakuin University)

1. はじめに

東海地方の丘陵地には、湧水湿地が数多く分布している。湧水湿地の定義は文献によって若干の揺らぎがあるが、本稿においては、湧水によって形成された、泥炭に乏しい湿地とする。こうした湿地には、東海丘陵要素植物（植田 1989）をはじめとして、希少な動植物種が多く確認されていることから、保全上の重要性が高い。しかしながら、湧水湿地は概して面積が小さく、二次的な自然の中に存在することから、長い間等閑視されてきた。広大で原生的な自然の中にある泥炭地と比較して研究は遅れており、「どこに、どのような湿地が、どれほど存在するのか」という基礎情報さえ整っていない。その一方で、湧水湿地の大部分は都市近郊の丘陵地に存在するため、都市の膨張とともに多くが失われ、今日においても少なくない湧水湿地が存続の危機に瀕している。この状況の中で、分布をはじめとした基礎情報の整備とそれに基づく保全は急務である。

上記の問題に取り組むため、筆者らは 2013 年に「湧水湿地研究会」を立ち上げ、各地の自然環境に熟知する市民や在地研究者とともに、東海地方の湧水湿地目録を作成するための活動を続けている。この活動は、フィールドにおける湿地環境および植物相の調査を主とするが、やみくもな踏査を行っても成果は得られない。このため、事前調査として多くの関連文献を渉猟し、あらかじめ知られている湧水湿地と疑われる環境の分布を洗い出す作業を行っている。こうして得られた文献上の分布情報は、フィールドで得られた分布情報と照合することで、過去からの変遷を知る手掛かりともなる。

本稿は、上述の目的で収集した文献資料に基づき、八竜湿地を取り巻く名古屋市および

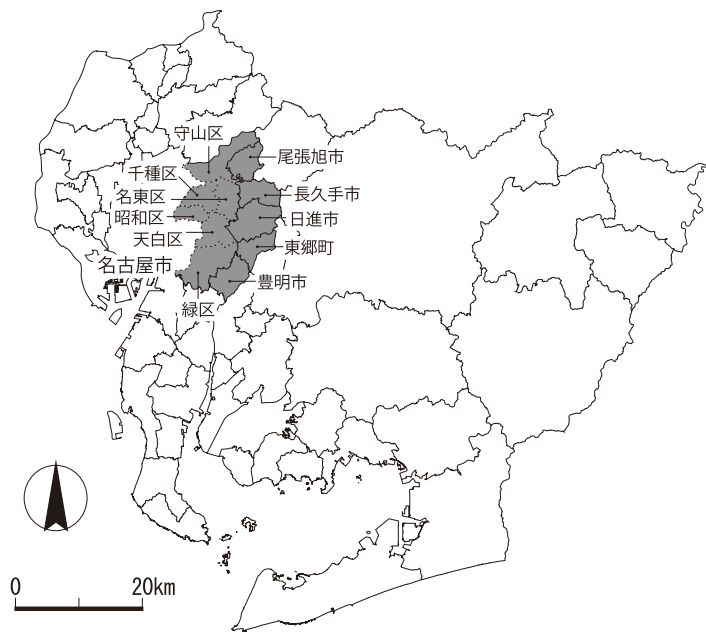


図 1 文献調査エリア

び尾東地域（尾張旭市・長久手市・日進市・東郷町・豊明市：図1）を対象として、湧水湿地の可能性のある環境の既往記録をまとめたものである。

当該地域からは、現時点で50カ所以上の湧水湿地が確認されている。しかし、湧水湿地に触れた既往記録は乏しく、あったとしても、一部の著名な湿地に集中している。また、湧水湿地に関する情報は、発行部数の僅かな極めてローカルな報告書等に掲載されることも多い。以上の事情から、収集しきれていない文献は数多いと考えられる。本稿の内容にご批判をいただくとともに、漏れのある文献をご教示いただければ幸い甚だである。

2. 自然環境および社会環境

(1) 自然環境

対象地域は、地形的にみると、濃尾平野東部から尾張丘陵の西部に至る面積およそ445km²の範囲である。この範囲のうち、ほとんどの湧水湿地は東部の丘陵に存在する。

対象地域の東部は、東谷山の198m（名古屋市守山区）を最高所として、しばしば標高100mを超える起伏に富んだ丘陵となっている。これらの丘陵は細かく開析されており、こうした無数の谷に水源をもつ水路は、3つの水系に分けられる。北部（守山区・尾張旭市・長久手市など）は庄内川水系、中部（名東区・天白区・緑区・日進市など）は天白川水系、南部（東郷町・豊明市など）は境川水系である。

丘陵を構成する地質は、中・古生層の露出する東谷山付近など一部を除き、東海層群としてまとめられる後期中新統～鮮新統である。これは、砂礫と泥（粘土・シルト）の互層をなす非固結の層で、地域を特徴づける陶磁器産業の基盤である。八事層や唐山層と呼ばれる更新統が頂部を覆う丘陵の西端（千種区・昭和区等）は、段丘として分類されることもある。

丘陵の植生は、大部分がアカマツやコナラの優占する二次林である。対象地域の気候的極相は、シイ・カシ等の優占する常緑広葉樹林であるが、中世以来の窯業の発達に伴い収奪された結果、現在は社寺林等として小面積が残るのみである。ただし、燃料革命以降、二次林の管理が行われなくなり、植生遷移が進んだ近年では、ソヨゴ・ヒサカキ・アラカシなどの常緑広葉樹が卓越しつつある場所もある。

なお、名古屋市千種区・昭和区付近から同市中区・熱田区付近は、熱田台地と呼ばれる台地が分布し、その西は沖積低地あるいは埋立・干拓地となっている。現在、市街化が著しいこうした場所に、湧水湿地の存在は確認されていない。

(2) 社会環境

対象地域は中部地方の中心都市である名古屋市とその隣接地にあたり、多くの人口を擁する。総人口は約262万人で、名古屋市を除いても約34万人を数える（2016年）。尾東地域は、名古屋市のベッドタウンとしての人口増が今日でも激しい。2006年からの10年間の人口増減率をみると、長久手市の126.0%を筆頭に、最低の豊明市でも101.8%と、減少している地域はない。地域全体として、今後もしばらくは人口増加が続くと考えられる。

この結果として、土地利用に占める宅地の割合は高い。名古屋市の52.1%は別格としても、尾東地域でも38.5%（尾張旭市）～27.1%（長久手市）と、すべての市町で1/4以上が宅地

として利用されている。ただし、名古屋市守山区と尾張旭市の境界付近、長久手市と日進市の西部には比較的まとまった森林が残存しており、このほかにも都市緑地として残された小面積の森林が点在している。現在残されている湧水湿地のほとんどは、こうした森林や緑地に存在する。

3. 湧水湿地の可能性のある環境の既往記録

以下に、湧水湿地の可能性のある環境の既往記録を、地区別に記載する。

先述したように、湧水湿地は、湧水によって形成されることと、鈹質土壌をもつことによって特徴づけられるが、こうした物理環境面を添えて湿地環境を記録した文献は多くない。そこで、こうした環境に特徴的に出現する植物群落を主たる判断基準として、文献上から湧水湿地を抽出することとした。具体的には、ホシクサ属・ミカヅキグサ属が卓越する湿性草原、あるいはシデコブシ等が卓越する湿地林に関する記述があった場合を、湧水湿地の可能性のある環境とみなした。ハッチョウトンボ・ヒメタイコウチなど湧水湿地を特徴づける、移動性に乏しい昆虫類も指標となりうるが、本稿では検討できていない。

記録は、原則として古いものから新しいものの順になるよう記載した。湿地・湿原などの用語と名称は、注記のない限り原典に従った。利用の利便性を考え、行政機関等の発行する報告書は、引用時に、編著者・発行年のほかにタイトルを付した。

(1) 対象地域全体または名古屋市域全体に関してまとめられたもの

浜島(1976)は、愛知県尾張地方の「小湿原」10カ所を分布図に示し、そのうち8カ所の植生調査を行った。調査地として挙げられて湿地のうち、対象地域に存在するものに、滝の水湿原(AおよびB)/緑区、五色園湿原(AおよびB)/日進市、大森湿原/守山区の3カ所がある。このほか、分布図にのみ示された湿地として、「八事」/天白区、「勅使池下」/豊明市の2カ所がある。

波田・本田(1981)は、名古屋市東部(一部、尾張旭市)に点在する複数の湿原植生を調べ、植物社会学的な分類を行うとともに、灼熱損失量との比較を行った。調査した湿地のある地名として以下の8カ所が挙げられている:1)東谷山/守山区、2)下志段味/守山区、3)滝ノ水池/尾張旭市、4)吉根/守山区、5)大森/守山区、6)鹿子殿/千種区、7)八事裏山/天白区、8)黒石/天白区。なお、5)大森と8)黒石は、それぞれ後述する八竜湿地・島田湿地の存在する場所の地名である。

『周伊勢湾要素植物群の自然保護』(菊池ほか1991)は、愛知県・岐阜県・三重県を中心とする地域の121カ所を調査し、「周伊勢湾要素植物群」の自生地のリストと分布図を示した。この大部分が湧水湿地と考えられるが、自生地保護のためか、自生地の名称や詳細な位置はわからない。分布図からは、対象地域の付近にも、数カ所の調査地の存在が確認できる。

『名古屋市の植生』(中部植生研究グループ1991)は、名古屋市内丘陵地の湧水のある谷間に、湿原が生成・温存されていることを述べ、その植生を種組成に基づいて12に分類した。市内に存在する具体的な湿地として、大森八竜湿地・島田東部湿地の2カ所を挙げている。

また、『名古屋市の植生自然度及び自然保護に関する調査報告』（中部植生グループ 1993）は、名古屋市内の主な湿地植物群落として、以下の9カ所の湿地を挙げている：1) 鹿子殿湿地植物群落／千種区、2) 大森八竜湿地植物群落／守山区、3) 東谷山湿地植物群落／千種区、4) 下志段味湿地植物群落／守山区、5) 吉根湿地植物群落／守山区、6) 滝の水湿地植物群落／緑区、7) 八事裏山湿地植物群落／天白区、8) 東山湿地植物群落／千種区、9) 島田東部湿地植物群落／天白区。このうち、2) 大森八竜、8) 東山、9) 島田東部の3カ所については、植物群落と立地環境の特色を詳細に述べている。

『名古屋市湿地目録』（名古屋市湿地研究会 1992）は、名古屋市内の湿地の環境と主な自生植物を網羅した貴重な記録である。1992年（一部1993年に補足）に調査が行われ、調査地76地点のうち、「湿地としての植生を備えているもの」を39カ所選定した。記述によって、湿地のおよその場所を知ることができるが、惜しむらくは詳細な地図がなく、ピンポイントでの特定がしづらい。区別に湿地数をみると、守山区19、千種区7、緑区4、天白区・名東区・中区・港区各1となっている。なお、挙げられた湿地のほとんどが、植生や環境の記述から湧水湿地の可能性が高いが、中区1カ所は名古屋城外堀、港区1カ所は藤前干潟周辺の塩生湿地であり、湧水湿地とは明らかに異なる。個々の湧水湿地の位置情報については、膨大になることと、現存する場合の保護上の事由によって本稿では割愛する。なお、この文献は原則として非公開とされており、名古屋市内の図書館等では所蔵していない。

『愛知県の植生』（愛知県農地林務部 1994）は、「愛知県における湿地・湿原植物群落」として尾張地区内にみられる24カ所の湿地植物群落を示すとともに、それぞれの主な自生植物を記録している。このうち、当該地域に存在するものを挙げると、次の12カ所となる：

1) 大森八竜湿地植物群落／守山区、2) 東山湿地植物群落／天白区、3) 島田東部黒石湿地植物群落／天白区、4) 八事裏山植物群落／天白区、5) 鹿子殿湿地植物群落／千種区、6) 吉根湿地植物群落／守山区、7) 下志段味植物群落／守山区、8) 東谷山植物群落／守山区、9) 滝の水植物群落／緑区、10) 大高町湿地植物群落／緑区、11) 五色園湿地植物群落／日進市、12) 沓掛湿地植物群落／豊明市。なお、大森八竜湿地と東山湿地については植生図が示されている。

(2) 名古屋市域における地区別・湿地別の記録

名古屋市では、守山区・千種区・昭和区・天白区・名東区・緑区の6区について、湧水湿地の可能性のある環境の記録が存在する。

守山区

区南部にある八竜湿地（文献によって、大森湿地・大森八竜湿地とも）についての報告が多数ある。植生に関する総合的な調査が行われた研究には、古いものから、本田（1977）、中西・柴田（2005）、水源の森と八竜湿地を守る会（2010）があり、八竜湿地調査研究会（2015）は、湿地内のボーリング調査から湿地の変遷を明らかにしている。このほか、湿地の外来生物対策について考察した野呂（2012）もある。また、八竜湿地とは別に、金城学院大学敷地内（金城台）にかつて湧水湿地が存在したことも指摘されている（小野 2013）。湿地保全の経緯については、柴田（2015）も参考になる。

これ以外の、守山区内における湧水湿地の可能性の高い環境の記録としては、次のようなものがある。『志段味地区自然環境調査報告書』（志段味地区自然環境調査会 1984）は、区北部に相当する志段味地区内の複数の湿地を記録している。植生から判断して湧水湿地と考えられる環境は、大久手池東南丘陵内、滝の水池（海老蔓池）北部、安田池東方の3地域に記録されている。また、飯尾（2004）は、東谷山の南東斜面と南斜面に湧水湿地が存在することを述べている。石原（2014）は、小幡緑地のマメナシ自生地を記録する中で、同緑地内に存在する竜巻池の東池畔に、トウカイコモウセンゴケ・ミミカキグサなどが生育する湧水湿地が存在することを記している。

千種区

平和公園自然観察会（1999）は、区中央部の平和公園南部に湿地が存在し、モウセンゴケ・ミミカキグサ・シラタマホシクサ・サギソウ等が生育することを記している。

昭和区

宝珠院には名古屋市天然記念物に指定されているマメナシ（別名イヌナシ：東海丘陵要素植物）の自生地があるが、少なくとも現在は湿地ではない。ただし、現地の解説版によると、「かつてこの付近は、隼人池に接する湿地帯で、ここにイヌナシの群落があったことが記録されており、この寺に残された二本の木は、自然群落の名残を示す貴重な資料である」と記され、湧水湿地があった可能性がある。ただし、「湿地帯」が存在したことを記した記録の原典は把握できていない。

このほかに、『昭和区誌』（昭和区制施行 50 周年記念事業委員会 1987）に掲載されている古老の座談会の中にも、区内に存在した湿地への言及がある。具体的には、「新池の上に籠池があった。現在はテニスコートになっている。サギ草がいっぱいあり、湿地帯があったですね」というものである。地図で確認を行うと、この場所は上記のマメナシ自生地から北に 500m ほどの別の谷である。

天白区

『島田緑地自然生態園の植生及び昆虫相』（白玉星草と八丁トンボを守る島田湿地の会 2016）は、区東部の都市緑地「島田緑地」に保護されている島田湿地（文献によって、島田東湿地・島田東部湿地とも）の植生と昆虫相についてまとめている。この湿地の周囲には、より広大な湿地が存在していたことが知られている。宅地開発の中で現在の範囲が保護された経緯と、開発の最中であった 1990 年代初頭の状況は、上山（1993）が現地取材に基づいて詳しく述べている。

名東区

飯尾ほか（2010）は、区東部の塚ノ杵池の植生を述べる中で、池畔にイヌノハナヒゲ等が生育する小規模な湧水湿地が存在することを示している。

緑区

区中央部にあたる滝ノ水地区の湿地群について、多くの報告がある。現在は、1カ所の

みが都市緑地「滝ノ水緑地」の中に保存されているが、かつては地区内に複数の湿地が存在した。富田（2006）は、地域住民への聞き取りから、高度成長期前に少なくとも11カ所の湿地が存在し、地域住民とのかかわりが存在したことを明らかにした。『滝ノ水の流れ』（名古屋土地区画整理協会1994）でも、開発以前からの住民による「組合長の小屋があった近所にシラタマホシ草の群生地がありました」との証言がある。開発前の調査記録としては、浜島（1974, 1979）、脇田（1979）がある。浜島（1979）は、滝の水地区に8カ所の小湿原が存在することを図示し、ヒメミミカキグサ・シラタマホシクサ・カザグルマなどの特筆すべき種群が分布することを記している。脇田（1979）は、10m²以下のものまで含めると9カ所あり、うち4カ所は100～250m²と広いこと、環境と種組成によって「モウセンゴケ・ミミカキグサ湿原」「シラタマホシクサ湿原」「ヌマガヤ湿原」に分類できることを示した。その後、滝ノ水緑地として残された1カ所の湿地の環境と植生については、『滝ノ水緑地植生その他調査報告書』（名古屋市農政緑地局1990）に詳しくまとめられている。2010年には再度調査が行われ、『名古屋市緑区「滝ノ水緑地の植生」』（滝ノ水緑地の里山と湿地を育てる会2010）にまとめられている。

このほかの緑区内の湧水湿地を記録したものとしては、『名古屋市緑区水広下地区土地区画整理事業自然環境保全調査報告書』（脇田1989）がある。この報告書では、水広下地区の干上がったため池にイヌノハナヒゲ・ミミカキグサ・コモウセンゴケなどの湿地植生が成立していることを示し、その中にはヒメミミカキグサも含まれていたという。また、大主ら（2017）は、区南部にある大高緑地公園の花木園に湧水湿地が存在し、保全活動が行われていることを記している。

（3）尾東地域における地区別・湿地別の記録

尾東地域では、尾張旭市・長久手市・日進市・東郷町・豊明市の全市町に湧水湿地の可能性のある記録が存在する。

尾張旭市

『尾張旭市誌 文化財編』（尾張旭市誌編さん委員会1980）には、尾張旭市内には「大小の湫（窪地の湿原）」があり、そこにカキラン・ミズギク・ハルリンドウ・モウセンゴケ・イシモチソウが確認されることを記している。また、周囲の林地にマメナシが分布することが示され、具体的な生育地として「桜ヶ丘町大新池の上の湿地」の記載がある。ただし、同文献の記述によると、この湿地は1979年に都市開発によって消失したという。

『尾張旭の自然』（尾張旭市教育委員会1982）には、市北部に「酸性質の湿地」がわずかにみられ、ミカワシオガマ・ミズギク・サギソウ・カキラン・ミミカキグサなどが自生すると記載されている。その一方で、開発や湧水の汚染によって「10年前に比らべ激減」したともある。さらに「自然林として残しておきたいところ」として、「濁池東部の湿地」と、湿地のみられる「滝の水池あたり」を挙げている。

『改訂 尾張旭の自然』（尾張旭市自然調査研究会2000）には、市内2カ所の湿地が記されている。一つは、「維摩池北部の湿地」で、昭和30年代にはサギソウ・イシモチソウ・モウセンゴケ・ミミカキグサ・タヌキモ等が自生していたが、富栄養化によって消滅した

とある。この湿地は、後述の飯尾(2004)にも記されている。もう一つは、吉賀池の湿地(2003年に市天然記念物に指定された吉賀池湿地)で、シラタマホシクサ・ミカワシオガマなど東海丘陵要素植物をはじめとした多数の湿地植物が生育すること、保護・管理が実施され観察会が開催されていることが記されている。また、湿地の存在は明示されていないが、滝の水池(海老蔓池)の周囲の植物として、イシモチソウ・コモウセンゴケ・サワヒヨドリなどの湿地植物の記載がある。飯尾(2004)は、この滝の水池の上手に1985年ころまでシラタマホシクサ・モウセンゴケ・ミミカキグサが広く確認される「見事な湧水湿地」があったとするが、現在は灌木林にか変わったという。

飯尾(2004)は、愛知県森林公園内の尾張旭市側に、A～Gの記号が振られた7カ所の湿地の存在を示す。また、1970年代からの変化を追うと、森林化・遷移進行や盗掘の被害で、湿地植生が大きく変化したことも記している。

長久手市

『長久手町誌資料編2 自然』(長久手町史編さん委員会1983)は、「丘陵内湿地の植物」として、町東部の三ヶ峯丘陵を紹介し、随所に湧水が浸出して湿地を形成していること、こうした場所にモウセンゴケ・イヌノヒゲ・シラタマホシクサ・ミミカキグサ・ミズギク・サワシロギク等が生育していることを示している。「三ヶ峯丘陵の植物」と題された植生断面図には、こうした植物がまとまって自生する凹地が示されている。

『長久手の湿地』(長久手町教育委員会1995)には、寺田湿地と呼ばれる湿地の写真が掲載されているが、その環境や植生、位置などについて記述はない。なお、2017年現在の長久手市前熊寺田は、東部丘陵線(リニモ)公園西駅西側一帯に相当する。

『長久手町環境資源目録』(長久手町生活環境部2010)は、「多様性を有する生態系資源」として、複数のため池・明るい二次林・湿地を挙げ、特に町東部の三ヶ峯丘陵にこれらが集中することを記述している。また、具体的な「湿地を付帯する環境」として、次の5カ所を示している：鯉ヶ廻間上池・下池、かめの池、かきつばた池付帯湿地、一ノ井川上流湿地と湿地からの細流、二ノ池湿地群。なお、かめの池・かきつばた池は、2017年現在、愛・地球博記念公園(モリコロパーク)内に存在している。二ノ池湿地では、市も支援する市民団体による保全活動が行われているが、2017年現在、公表された報告書等はない。

高崎(2013)は、長久手市内に存在する複数の湿地の所在と、主な自生植物、並びに環境の概要について記している。長久手町生活環境部(2010)とほぼ同じ場所を示しているが、それ以外の場所も含め、より詳細な環境を紹介している。具体的な地名としては、前熊一ノ井堀越川源流の谷、前熊一ノ井一ノ井川源流の谷、岩作三ヶ峯農総試内、岩作三ヶ峯・熊張茨ヶ廻間記念公園内、熊張福井・東山などである。

日進市

『日進町の植物』(川島1987)は、市内東部にイヌノハナヒゲ類やモウセンゴケ・ミミカキグサ・シラタマホシクサ等を産する複数の湧水湿地が存在することを記している。そのうちの一つ、五色園湿地における周辺の森林を含めた植生断面図が記されている。また、保護したい湿地植物群落として、「総合運動公園東湿地(現在は大清水湿地と呼称されている)」「五色園湿地」「新池湿地」の3カ所を挙げ、植生および環境の概要を述べている。な

お、この3湿地では、2017年現在、いずれも市が認知する保全活動が行われている。

これらの湿地に関しては1970年代から1990年代にかけて、浜島繁隆氏による調査が行われている。五色園湿地で行われた植生調査の結果は、浜島（1974）にある。岩藤新池の湿地については、浜島（1992）に、気温・地表水温・土壌pH・植物季節・遷移度を調べた結果が示され、浜島（1993）では、植生回復を目的としたヌマガヤ除去の試みとその結果について報告されている。

東郷町

『東郷の郷土資料Ⅰ』（東郷町教育委員会1979）の「記念物（植物）」の項には、町内の粘土層上に小湿地が発達していること、そこには、モウセンゴケ・ハルリンドウ・ミミカキグサ・シラタマホシクサ等の生育が認められることを記している。また、具体的な場所として、「美化センター近くのノハナショブ自生地」や「部田岩ヶ根地区」の「山水を流す溝の周囲」などを挙げている。

『東郷町誌 第2巻』（東郷町誌編さん委員会1980）は、「山間湿地で亡びかけている」植物として、モウセンゴケ・イシモチソウ・サギソウ・シラタマホシクサ・ミズゴケ・ハルリンドウ・ミソハギを列挙し、これらの自生地として次の地名を示している：春木の下鏡田・黒土、諸輪の篠木・百々・片平山。なお、東郷町教育委員会（1979）の示す「美化センター付近の湿地」も挙げられている。この施設は2017年現在も諸輪百々地区にあるが、周囲に湿地を確認することはできない。東郷町内からは、まとまった面積をもつ湧水湿地が、すでに消滅したものと考えられる。

豊明市

『豊明市史資料編補7 自然』（豊明市史編集委員会2003）は、「市北部や東部の丘陵地下部の緩やかな斜面には、湧水に涵養された湿原が存在する」ことを示すとともに、土地改良事業に伴って、現在は僅かに残るのみとなったことを記している。具体例として、市内で面積が最大である大狭間湿地と、ナガバノイシモチソウ自生地として知られる小狭間湿地（いずれも沓掛町）の植生調査結果を記している。

4. まとめ

上記の湧水湿地の可能性のある環境のうち、ある程度場所が絞り込めるものについて、図2にまとめた。今回対象とした地域全体で見ると、湧水湿地の可能性のある環境が集中する地域が4か所見いだせる。

第一は、名古屋市守山区と尾張旭市の境界付近である。ここは、隣接する瀬戸市につながる瀬戸丘陵と呼ばれる地域であることから「瀬戸丘陵湧水湿地集中地域」と仮称する。本稿では記述しなかったが、東に隣接する瀬戸市側にも多くの湧水湿地が確認されている。

第二は、名古屋市千種区東部から昭和区東部を通り天白区北部に至る地域である。この周辺は千種丘陵と呼ばれることから「千種丘陵湧水湿地集中地域」と仮称する。

第三は、長久手市東部から日進市東部に至る地域である。この周辺は長久手丘陵と呼ばれることから「長久手丘陵湧水湿地集中地域」と仮称する。本稿では記述しなかったが、

東に隣接する豊田市やみよし市にも多くの湧水湿地が確認されている。

第四は、名古屋市天白区南部から緑区東部を経て豊明市北部に至る地域である。この周辺は緑・豊明丘陵と呼ばれることから「緑・豊明丘陵湧水湿地集中地域」と仮称する。

これらは名古屋都心に最も近い湧水湿地集中地域であり、いずれも都市化の影響を強く受けている。千種丘陵湧水湿地集中地域は戦前から、そのほかの集中地域でも高度成長期以降、土地開発によって多くの湧水湿地が消滅したと考えられる。本稿に記載した湿地の中にもすでに消滅したものが複数ある。個々の湧水湿地が記録される例はむしろ稀であることから、記録されずに消滅した湿地のほうが多いと推測される。これらの地域に現在確認できる湧水湿地は、こうした危機を辛うじて乗り越えたものである。そして、その背景には地域の人々の粘り強い保存運動があった例が複数あることも、付記しておきたい。

さて、「はじめに」でも述べたように、本稿はあくまでも踏査に基づく分布調査の事前準備として、文献調査の結果をまとめたものである。現在、この結果を参照しつつ踏査を進めているが、その結果については隣接地域とあわせて別途報告書にまとめられる予定である。

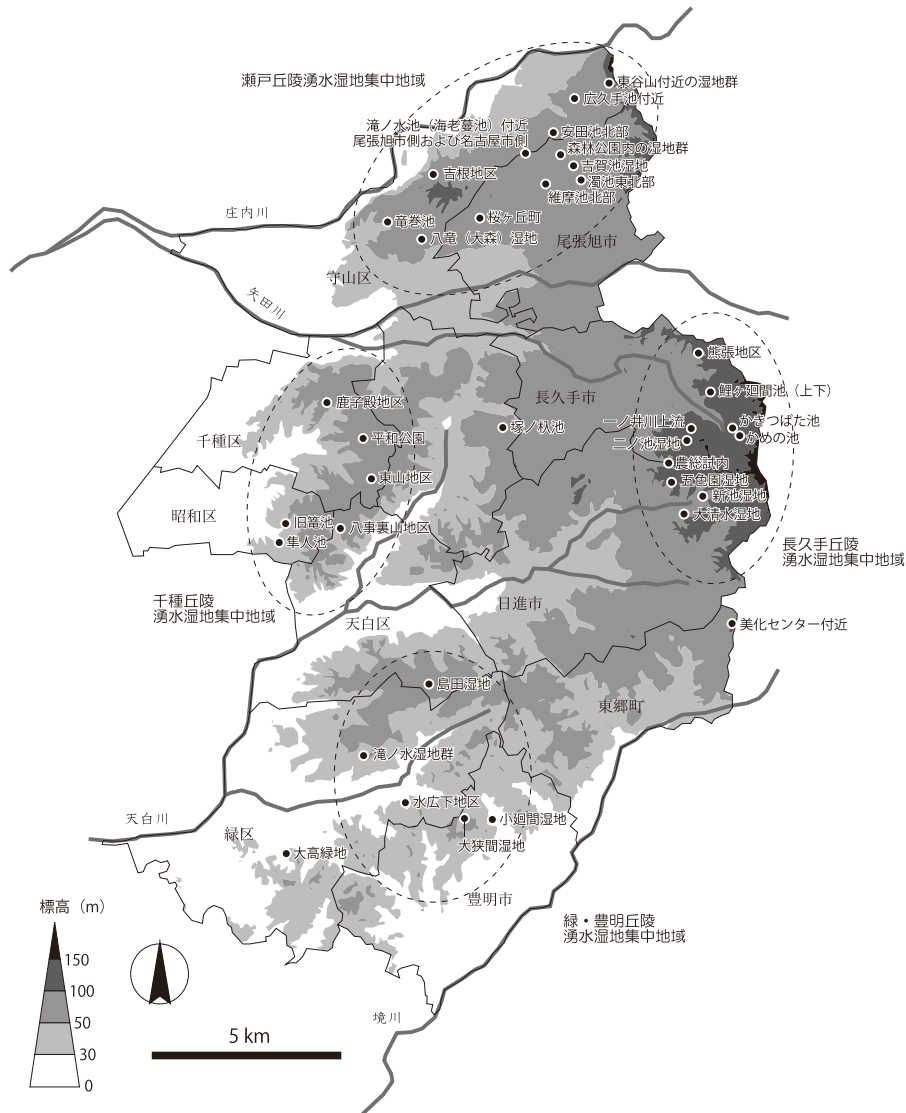


図2 文献調査より明らかとなった湧水湿地の可能性のある環境の分布とその集中地域
すでに消滅した湿地を含む。～地区、～付近と表記した湿地の位置は厳密ではない。

文献 (50 音順)

- 愛知県農地林務部自然保護課編 (1994) 『愛知県の植生』 愛知県.
- 飯尾俊介 (2004) 愛知県森林公園の湿地 - 追跡調査から見えてきたもの -. ため池の自然 40 : 19-26.
- 飯尾俊介・富田啓介・中村肇 (2010) 名古屋市名東区塚ノ杵池の植生及び植物相 - 塚ノ杵池 湿地・水生植物調査結果 (2008 ~ 2010 年) より -. ため池の自然 49 : 8-11.
- 石原則義 (2014) 小幡緑地本園のマメナシ自生地の保全と保護の現状. なごやの生物多様性 1 : 49-58.
- 植田邦彦 (1989) 東海丘陵要素の植物地理 I 定義. 植物分類・地理 40 : 190-202.
- 上山智子 (1993) 『幻の花々とともに』 風媒社.
- 大主順一・谷幹雄・寺本匡寛 (2017) 大高緑地の花木園における植生管理と植物相. なごやの生物多様性 4 : 47-57.
- 小野知洋 (2013) 金城台の地学的・地理学的・生態学的歴史を探る - 江戸期から現在に至る経緯 -. 金城学院大学論集自然科学編 9 (2) : 10-21.
- 尾張旭市教育委員会編 (1982) 『尾張旭の自然』
- 尾張旭市自然調査研究会 (2000) 『改訂 尾張旭の自然』 尾張旭市教育委員会.
- 尾張旭市誌編さん委員会 (1980) 『尾張旭市誌 文化財編』 尾張旭市.
- 川島勝 (1987) 『日進町の植物』 日進町教育委員会.
- 菊池多賀夫・植田邦彦・後藤稔治・佐藤徳次・高橋弘・高山晴夫・中西正・成瀬亮司・浜島繁隆 (1991) 『周伊勢湾要素植物群の自然保護』 財団法人世界自然保護基金日本委員会.
- 志段味地区自然環境調査会 (1984) 『志段味地区自然環境調査報告書』.
- 柴田美子 (2015) 『ひびきあう生命 - なごや八竜湿地と私』 光陽出版社.
- 昭和区制施行 50 周年記念事業委員会編 (1987) 『昭和区誌』 昭和区制施行 50 周年記念事業委員会.
- 白玉干草と八丁トンボを守る島田湿地の会 (2016) 『島田緑地自然生態園の植生及び昆虫相』.
- 水源の森と八竜湿地を守る会編 (2010) 『八竜湿地の植生 - 次世代に引き継ぐために -』.
- 高崎保郎 (2013) 『愛知県長久手市の蜻蛉・蝶・自然』.
- 滝ノ水緑地の里山と湿地を育てる会 (2010) 『名古屋市緑区「滝ノ水緑地の植生」 - 都市の緑地を守るために -』
- 中部植生研究グループ (1991) 『名古屋市の植生』 名古屋市計画局.
- 中部植生研究グループ (1993) 『名古屋市の植生自然度及び自然保護に関する調査報告』 名古屋市環境保全局.
- 東郷町教育委員会編 (1979) 『東郷の郷土資料 I』.
- 東郷町誌編さん委員会 (1980) 『東郷町誌 第 2 巻』 東郷町.
- 富田啓介 (2006) 知多～尾張丘陵におけるシラタマホシクサと地域住民のかかわりの変遷 (昭和初期～現代). 愛知県史研究 10 : 151-160.
- 豊明市史編集委員会編 (2003) 『豊明市史資料編補 7 自然』 豊明市.
- 中西正・柴田美子 (2005) 大森湿原の植生. 鳳来寺山自然科学博物館報 34 : 9-24.
- 長久手町教育委員会編 (1995) 『長久手の湿地 平成 7 年度長久手町郷土資料室特別展』.
- 長久手町生活環境部環境課編 (2010) 『長久手町環境資源目録』 長久手町.
- 長久手町史編さん委員会編 (1983) 『長久手町史資料編 2 自然』 長久手町.
- 名古屋湿地研究会 (1992) 『名古屋湿地目録』 (非公開資料)
- 名古屋市土地区画整理協会編 (1994) 『滝ノ水の流れ 名古屋市滝ノ水土地区画整理組合記念誌』 名古屋市滝ノ水土地区画整理組合.
- 名古屋市農政緑地局編 (1990) 『滝ノ水緑地植生その他調査報告書』.
- 野呂達哉 (2012) 八竜湿地における外来生物対策. 金城学院大学論集自然科学編 8(2) : 9-17.
- 八竜湿地調査研究会編 (2015) 『名古屋市八竜湿地ボーリング調査報告書』.
- 波田善夫・本田稔 (1981) 名古屋市東部の湿地植生. ヒコビア別巻 1 : 487-496.

- 浜島繁隆 (1974) 名古屋東部湿地の植物. 生物教育 14 (10) : 7-8.
- 浜島繁隆 (1976) 愛知県・尾張地方の小湿原の植生 (I). 植物と自然 10 (5) : 22-26.
- 浜島繁隆 (1979) 失われゆく滝の水 (名古屋市) の小湿原. 植物と自然 13 (12) : 56-57.
- 浜島繁隆 (1992) 岩藤新池 (愛知県日進町) 集水域の小湿地の環境・植物季節と植生. ため池の自然 16 : 1-4.
- 浜島繁隆 (1993) 岩藤新池 (愛知県日進町) の小湿地におけるヌマガヤ除去後の植生回復. ため池の自然 18 : ページ不詳.
- 平和公園自然観察会 (1999) 『名古屋市新世紀計画 2010 への提言 平和公園南部を自然公園都市, 維持・管理を市民参加で行う』.
- 本田稔 (1977) 大森湿原の植生 - 金城台の自然 (4) -. 金城学院大学論集家政学篇 17 : 9-24.
- 脇田晴美 (1989) 名古屋市滝ノ水地区土地区画整理組合施行予定地域の自然環境保全調査報告書』.
- 脇田晴美 (1989) 『名古屋市緑区水広下地区土地区画整理事業自然環境保全調査報告書』.